私たちは３月１０日を生きている

藤枝　高校３年　立石　佳歩

８月１０日から１２日にかけて、東日本大震災にて被災した宮城・福島の地を回った。３日間、津波の被害を受けた地を見て、被災した方のお話を聞いて一番印象に残ったのは、最後にお話を伺った菅野みずえさんの、「わたし達は３月１１日を生きているけれど、あなた達は３月１０を生きている」という言葉だ。

この言葉を聞いた時、初めは意味が分からなかった。「３月１０日を生きている」というのは、予想される東海地震や南海トラフ地震、またはそれらによって起こる可能性のある原発事故等が起きていないということだ。

３日の間に、門脇小学校の生徒や住人が、津波から逃げるために駆け上がった坂道や階段を歩き、バスの中から原っぱになってしまった元住宅地やガレキの山を見、私と年の変わらない福島の学生や様々な立場の被災者の話しを聞いて、現実感のなかった津波や原発事故というものが一気に現実的になった。それが、菅野さんの言葉でさらに鮮明になった。

今回の「平和をつくる旅」に参加したのは静岡・高知・福島の３県だ。静岡も高知も、３．１１のような大地震がいつ発生してもおかしくないし、津波の他にも原発事故の心配がある。しかし、その心配は静岡と高知だけのものではない。地震大国といわれる日本の各地に、５０基もの原子力発電所がある以上、どこに３月１１日が来るかわからない。

地震や津波は天災で、防ぎようがない部分もあるかもしれない。しかし原発事故は人災だ。福島の事故から学べば、未然に防げることがあるはずである。原発がもたらすものは多いが、それ以上のリスクが付いて回るということを、３日間の旅でいやというほど思い知った。

旅が終わった今、日本のどこにも３月１１日が来ないことを心から祈っている。